

霞ヶ浦はどうなるのかということでもとり組んでみようということになりました。そこで、第一の水利用の問題はこの分野の専門家ということで、茨城大学農学部で農業水利学を担当しておられる久保田治夫先生に、第二の霞ヶ浦の汚染問題は同じく茨大農学部農芸化学科で霞ヶ浦や流入河川の水質分析などをしておられる高村義親先生にそれぞれお願いしました。第三の総括、霞ヶ浦はどうなるのか：：これからの展望という難問は、結局、茨大農学部農芸化学科の副島正美先生にお願いしました。

まず、久保田先生は、昭和四十六年度から進められている霞ヶ浦の水がめ化<sup>1</sup>常陸利根川の逆水門の常時締めきりについて、政府の「利根川水系における水質源開発基本計画」を紹介、解説しました。そして水がめ化の結果おこる湖水面の水位の変動について触れ、このことは第一に増水時における洪水の危険性のあること、また低水位時には、取水のための揚水機の機能低下などの問題のあることを述べました。さらに、水位低下は汀線の後退となり、魚の産卵場所が失われ、また水位の変動によって水生植物の死滅を招く恐れのあること、そしてこの水生植物は水質汚濁防止に重要な役割をもっているの

また、県の新総合振興計画をもとにして、霞ヶ浦水利用計画について触れ、この水がめ化が、現在の1、4倍にふくれあがり第一位にのし上がる工業用水、とりわけそのうちの圧倒的大部分を占める鹿島工業用水のためのものであることを明らかにしました。

つづいて高村先生からは、七月十三日に農学部で行なった霞ヶ浦全域調査の結果をもとに、霞ヶ浦の驚異的ともいうべき汚染の進行の現状について話がありました。すなわち調査の結果から、霞ヶ浦の多くの地点の湖底では酸素がなくなっており、魚の生息できる状態でなくなっていること、そして七月十七日に鯉の大量死が起きた高浜地先ではCODが二八PPMというかつてない高い値が認められたことが話されました。そしてこのような霞ヶ浦の汚染が昭和四十二年から急速に進行したものであり、この急激な汚染は昭和三十八年からの霞ヶ浦周辺の大規模開発の指定、着工にひきつづいて起こったものであることを「公害白書」などの資料から明らかにしました。

つぎに、自然環境における食物連鎖と生物濃縮について解説し、霞ヶ浦におけるPCBの生物濃縮について触れました。県公害技術センターの分析値をもとにして、

水中に検出されないにも拘らず、プランクトンでは〇、